

公共図書館の居場所としての可能性 ー上田情報ライブラリーにおけるフィールドワークを通してー

宮下 鈴音

日常の役割や利害関係から解放され、気軽に誰かと会話を行ったり、交流を楽しむことができる場所を人々は求めている。住居や職場以外の場所として、第三の居場所が着目されている。公共の施設で居場所になりうる場合は、公園・公民館・公共図書館などが挙げられる。その中でも、公共図書館はサービスを提供するだけでなく、地域住民が自らで図書館の在り方を見つけることができる場所である。このような複数の可能性を持つ公共図書館という「場」に利用者は何を求めているのかについて、フィールドワークを用いて明らかにする。

本研究では、地域に根ざした図書館運営を行い、新しいサービスを積極的に導入してきた長野県上田市の公共図書館「上田情報ライブラリー」および、運営で連携している「NPO 法人上田図書館倶楽部」を対象にする。まず、「居場所」に関する文献調査を行った。次に、上田情報ライブラリーおよび、NPO 法人上田図書館倶楽部へのインタビュー調査を2014年7月9日に実施した。その際、公共図書館を運営する上で他の団体との連携に焦点を当ててインタビューを行った。その後、インタビュー調査を踏まえ上田情報ライブラリーの館内で利用者への参与観察を2014年9月16日～19日に実施した。

調査の結果、インタビュー調査からは、複数の組織で運営を行うためには、お互いの長所・短所を理解する必要があることが明らかになった。参与観察からは図書館が、情報リテラシー機関および地域の居場所として重要な公共施設となっている。

上田情報ライブラリーは、社会人にとって気兼ねなく何回でも訪れることができ、他者からの干渉がない。学生にとっては、学校・自宅とは異なった自分だけの学習スペースになる。また、親子で参加できる講座が多く開かれている。さらに、高齢者にとってボランティアの活動の場となっている。上田情報ライブラリー全体が、豊かな生涯学習の活動の場を利用者に提供していることが明らかになった。

本研究では、公共図書館の「居場所」としての役割を明らかにしようと試みた。研究対象となった上田情報ライブラリーは当初から地域に根ざした図書館作りを目指し、NPO 法人上田図書館倶楽部と協力関係を育んできた。両組織へのインタビュー調査と参与観察を通じて複数の団体が図書館運営を行う上での利点・問題点や課題などを浮かび上がらせることができた。しかし、本研究では表題になっている「居場所」を明確に定義することはできなかった。今後は、「居場所」という抽象的な言葉をより具体的に解明していくための研究が必要とされる。

(指導教員 吉田右子)